ねじりはちまき

10 月　神無月(カンナヅキ)寒露　霜降の月になりました。

10 月 1 日衣替えです。8 日寒露で、20 日えびす講、23 日霜降です。

寒露とは 24 節気の一つで立秋の日から数えて 60 日目で移動性高気圧の影響で天気も安定し温度も下がって過ごしやすい陽気が続きます。このころになると秋の収穫もたけなわになり、野山には秋が静かにしのび、朝晩は肌にやや寒気を感じはじめる候となります。

山梨県の富士吉田市は 21 日に富士山の初雪化粧を宣言しました。気象台で発表する初冠雪とは別に、市が独自に確認して発表しており、昨年より 32 日も早いということです。

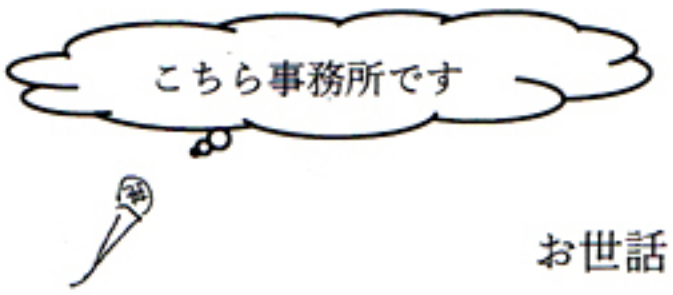
地方にも寒さが早いのではないかと思います。

コロナもいることだし、十二分の身体の保養が必要だと思います。

厳しい冬を乗り越えるためにも…

幸田　常一

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊



お世話になっております。

引き続き本宮市の現場で、水害による復旧工事をさせていただいております。

夢を見続ける男　NO78

明智光秀の心の内

NHK大河ドラマ「麒麟がくる」が再開された。小生の最大の関心事は、日本史最大のミステリーと言われる「本能寺の変」をどのように描くのか、である。光秀は何故信長を討つに至ったのか。光秀本人は何も記録に遺していない。諸説ある中で、このドラマではどの説を採用するのか。それとも新しい説を打ち出すのか、楽しみである。歴史ドラマには、推測の余地があり、その方が面白い。坂本竜馬暗殺事件にしても同様である。今回は、戦国時代という状況下で光秀はどういう生き方を信条として生き抜いてきたのか、その心の中に分け入って見よう。あの時突如「敵は本能寺にあり」と思ったわけではあるまい。積もり積もったものがあったればこそ、今が信長を討つ絶好のチャンスと捉えたのは間違いなかろう。それでは、光秀の中に「積もりに積もったもの」とは何であったのか。しかし、「天下布武」を目前にしていた信長に代わって「天下を取る」ことまで、本気に考えていたのだろうか。それとも「怨恨を晴らす」程度のことだったのだろうか。或は「信長の考え方からして、信長に天下を取らしてはまずい」と憂うるところがあったが故だろうか。それにしても、「本能寺の変」を起こした時の光秀の年齢は、当時としては隠居年齢の５０代半ば（生年が不詳・複数説あり）に達していたと思われる。この年齢にして、この行動をとるとは如何に。何故変を起こしたのか、その謎は深まるばかりだ。では、次に進もう。

さて、光秀が信長に仕えるようになった経緯はどうか。実は光秀は、足利義昭とも織田信長ともそれぞれ繋がりがあり、双方の仲を取り持つ役割を果たし、一時双方に仕えていたのである。ところが、やがて双方の対立が鮮明になり、挙兵した義昭を信長がやがて京都から追放してしまう。その追放劇の過程で、光秀は選択を迫られて信長側につくのである。室町幕府の再興を期す義昭を見限り、信長に新しい可能性を感じての選択であったのであろう。光秀という存在は、信長の下でその活躍ぶりが歴史の表舞台に登場するのだ。

ところで、光秀が信長の直臣（１５７３年）になってから本能寺の変（１５８２年）まで実に１０年もないのである。光秀は直臣になる前（１５６９年頃）から、数々の武功を挙げ、直臣になると城持ち（坂本城）の石高を与えられ、１５７５年には早くも織田家の重臣層に加えられる。さらに京都隣接の要地・丹波国を平定(１５７９年)し、丹波国一国を与えられて福知山城を築城する。と同時に、光秀の下に近江から山陰に向けた畿内方面軍が成立するのである。それだけ、信長の信任も厚かったわけである（次々と休む間なく出兵命令を出し、要所の攻略に当たらせた）。変の前年・１５８１年には、京都御馬揃え（信長が京都で行った大規模な観兵式・軍事パレード）では運営責任者を任されている。また、そういう状況の中で、同年６月２日付で光秀自ら定めた「明智家法」の後書きで、自分を取り立てくれた信長への感謝の文を書き記している。では、ここまでは、両者の関係に亀裂を生ずる兆候は表立っていない。では、その後はどういう展開になるのか。

変の年・１５８２年の５月のこと、光秀は安土城での徳川家康の饗応役を任ぜられたが、不始末があったとして信長から責めを受けてその役を解かれ、格下の羽柴秀吉の毛利攻めの支援を命じられるのである。その当時秀吉の毛利攻めを始め、信長の重臣はそれぞれ信長の天下布武の仕上げの任に当たるため、京都を離れて各所で戦に臨んでいた。光秀だけがその任から外れていた。本能寺の変は、秀吉の毛利攻めの支援に赴く途上で起こされたのである。信長は、京都・本能寺に軍を率いずに１００人足らずの従者とともに滞在していた。その情報がもたらされるや、６月２日の早朝本能寺へと軍を進め、信長を襲ったのである。襲ったのが光秀と知らされた信長は、「是非もない」と言ったと伝えられているが、信長には心当たりがあったのかも知れない。一方光秀の方は、襲う事前の軍議で武将たちに自分の胸の内を明かし、武将たち納得済みでの行動だったに違いない。だが、光秀は新政権に向けて体制を整える間もなく、変から１１日後には山崎の戦いで秀吉軍に敗れてしまう。そして、落ち延びる途上、落ち武者狩りに襲われて最後を遂げるのである。

さて、これからが推理である。どうなるものか。よくよく考えてみると、変の当時信長は、朝廷から征夷大将軍こそ受けていなかったが、既に天正３年（１５７５年）には、「権大納言」・「右近衛大将」に任ぜられており、「天下人」の地位を固めつつあった。その「天下人」を討ち果たせば、即自分が「天下人」にふさわしいと認めてもらえるとは光秀もそこまでは考えていなかったであろう。つまり、光秀は本気で天下をとることまでは考えていなかった、と小生は思う。ましてや、天下を取るには、単独行動をとることは考えられない。信長を討ったのには、別の理由があったのに違いない。さればとて、怨恨説もないと思う。これでは、私的で、大義名分が立たぬし、教養人としての光秀、それ相当の地位に昇りつめた光秀がそれを理由にするとは思われない。ひどい仕打ちがあったとしても、当時としてはありがちなことで、怨恨で討ったとしても人がついてこない。

最後に残るのが、「自分は天下を取る考えはないが、とにかく信長には天下を取らせたくない、信長は天下人にふさわしくない」という理由での決行だ。その理由とは何だったのだろうか。信長は、一つは必要以上の残虐行為（延暦寺の焼き討ち・伊勢長島一向一揆の殲滅作戦など）を行う、二つ目は当時の正親町天皇の譲位を迫るなど信長が朝廷を軽んじている（光秀は京都奉行職もやっていた）、と光秀の目に映ったのではないか。つまり、信長は、伝統的な権威を否定し、犠牲もいとわない手法で天下統一事業を行おうとしているとして、光秀は信長のやり方に違和感を抱いていたのではないか。ただ、それだけで決行に及ぶだろうか。信長亡き後は誰に託すのか、その辺のことをどう考えていたのか。そこがいまいち分からない。これ以上書き進めるのは難しいかなと思いあぐんでいた。

ところが、そんな折、書店に予約していた本を取りに行った時、偶然目に留まった本があった。「戦国時代を読み解く新視点」という本だ。立ち読みすると、本能寺の変のことも書いてあった。変についてそれこそ「新視点」が示されていたのである。それも、光秀の書状（原本）という第一級資料に基づくものである。光秀の変に関する書状（６月１２日付で、山崎の戦いの前日だ）で、紀伊雑賀（和歌山市）の反信長方の土豪・土橋重治宛の書状（返信）の原本である（これまでも写しの存在は知られていた）。そこには、何と「足利義昭の上洛（京都に入る）」のことについて書いてあるのだ。つまり、光秀の信長討ちは義昭を奉じてのことだったのだ。信長に敗退（１５７６年）した義昭はそれ以降、備後鞆の浦（広島県福山市）にあった。まだ「室町幕府将軍」の冠はそのままである。そして義昭を盟主とする「信長包囲網」もまだ存在した。その包囲網の最終的な解体を信長が決意し、軍事行動を開始したのが、天正１０年（１５８２年）のことなのである。これはまさに変の年に当たる。義昭と光秀が通じていた（直接会うことはなくても）とすれば、光秀がなぜ信長を討つ行動にでたのかが読みとれる。

ではどういうことで、光秀は旧主・義昭とよりを戻したのか。詳細は触れられないが、土佐（高知）の長宗我部元親との関係にあるようだ。信長の翻意で土佐一国の領有も危うくなっていた長曾我部と光秀は緊密な関係にあり、その長曾我部と反信長の毛利とが軍事同盟を結ぶ動きとなり、その過程で義昭からの光秀への接触（使者を通して）があり、気脈を通じる関係になっていたと思われる。一方、光秀は当時信長と関係で立場が弱まってきており、中国・四国統一後には遠国への国替えが言い渡されていたという事情もあった。

以上のような次第であるが、十分説明が尽くされていないが今回はこれで終わる。

東海・北陸境　両白山地＝加濃越山地の４山

9 月 19 日から 22 日にかけて東海・北陸境の 4 山に登った。この山域は昨年の 10 月から 11 月にかけて 2 回に分けて、飛越国境の 2 山（金剛堂山、人形山）と加越国境の 3 山（大笠山、大門山、医王山）を登っている。今回はその続きである。（ねじりはちまき 244 号、平成 2 年新年号）

両白山地：白山を最高峰とする北部の加越（白山）地域と能郷白山を主峰とする南部の越美（越前・美濃）山地の総称。加濃越山地ともいう。

（世界大百科事典）

加賀：石川、美濃（飛騨）：岐阜、越前：福井、越中：富山

【日程の概要】

9 月 19 日（土）移動　冠山峠　　車中泊
20 日（日）冠山。温見峠へ移動、能郷白山。六呂師高原へ移動　車中泊
21 日（月）経ケ岳。白川郷へ移動　　車中泊
22 日（火）三方岩岳。　移動　　帰宅

【今回登った山の概要】（百は日本百名山、◎は日本二百名山、○は日本三百名山）

1　冠山　　（○かんむりやま 1257m、越美国境の山）
2　能郷白山（◎のうごうはくさん 1617m、越美国境の山）
3　経ケ岳　（○きょうがたけ 1625m、加越山地の山）
4　三方岩岳（○さんぽういわだけ 1736m、飛騨・越中・加賀国境の山）

9 月 19 日（土）

彼岸の入り。妻とお墓参りし、花を手向け線香を上げる。出発は 11 時を過ぎる。雲はあるが空高く、天候の崩れは心配ないようだ。磐越道から北陸道をひたすら走る。新潟県、富山県、石川県を越えて福井県に入り、鯖江インターを降りる。途中ＰＡで 3 回休憩した。

コンビニで食料を買い込む。板氷と缶ビールも。市街地を抜け、しだいに山域になり舗装はされているが急坂の、岐阜県に至る国道 417 号線に入る。崖を削って作ったとのことで、左が切り立った山側、右が切れ落ちていてガードレールが壊れたままの小さいカーブの多い急坂の道。対向車はライトの光で分かる。数台降りてきたが、上り下りどちらかが退避行動をとる。

18 時半過ぎ、福井県と岐阜県の境、冠山登山口の冠山峠に着き、道路幅が広くなっている道の脇に車を駐める。ほかに車はない。自宅から 563ｋｍ、7 時間半かかった。車の温度計で 13℃、通信はできない。

寒いのでカッパを着て長靴を履き、お湯を沸かし、妻の作った持参のおにぎりと暖かいワンタンスープ、缶ビール、寒い。21 時前就寝。満天の星が近い。

20 日（日）【1　冠山】

6 時前起床。夜中に車が 1 台、朝方に 1 台来ていた。中年の男女のペアが出発した後、食事は摂らないで 6：30 出発。

峠には台座を含めると高さ 3m位横幅 1m超、上部が丸くなっている自然石の「冠山峠」の石碑と、高さが 1m弱の横型の石碑には、「越前国池田町」「美濃国揖斐川町」「美濃国藤橋村」「美濃国徳山村」と刻まれ、裏側には合併によって村がなくなったこととか、徳山ダム建設のため全村が水没し廃村になったことなどが書かれていた。

両脇が仮払いされ、踏み込まれた登山道を登り下りしながら少しずつ標高を上げていく。峠は標高が 1000mを越えているので山頂との標高差は大きくはない。眺望の利くところから見える山頂はまさに烏帽子のようで“冠”という名に納得する。少し平らなところの冠平に着くがここから右手が岩場になっていてロープが張られている。できるだけロープに頼らずに登って行く。岩はもろく滑りやすい。

7：35、登り切った所が狭い岩場の山頂だった。遠く朝もやの中に白山が見えていた。先着していた中年男女のペアの人から、自分が次に登る能郷白山などを教えて貰い、写真を撮って貰う。神戸六甲山の麓に住むという山ガールは若々しい服装の人。男の人は愛知の人だった。女性は意気盛んな人で、“足が長く見えるように撮って”とか“80 まで頑張るぞ！”と気炎を上げていた。私も調子に乗って「そうですよね、アンチ・エイジング！」と呼応した。笑顔の素敵な人だった。

冠山すぐ西側の金草岳（1227m）に登るという二人が下山し、少し霞んでいる早朝の山々の景観を楽しみながらパンを食べる。8 時下山開始。少し下ったら、老若男女、単独や、グループのハイカーが登ってきた。小学低学年の子供も一緒のファミリー登山者もいた。途中で数えるのをやめたが、30 人以上の人たちが登って来ている。9 時前登山口着。車が 20 台以上駐まっていて次々と登って行く。狭い山頂が心配になってきた。

【2　能郷白山】

9：20 能郷白山登山口を目指して出発する。集落のある所までは狭い急な下り坂だ。上って来る車に注意して進む。山中の峠を越えて大野市街地の中心部を避けて進み、郊外のコンビニで買い物をする。国道 157 号線に入り真名川ダムを経て地図上は南下、実際はしだいに山に深く入り勾配も増してくる。途中左手下方にあった麻那姫湖青少年旅行村は多くのファミリーと車とテントで賑わっていた。

しだいに道が狭くなりカーブの多い急坂を上って行くと福井県大野市と岐阜県本巣市の境、能郷白山の登山口、温見（ぬくみ）峠に11：55着、2時間半の移動だった。地図上で図ると冠山峠と温見峠は直線距離としては11ｋｍ位しか離れていない。

峠の道路は県境がピークで勾配があるが広くなっていて、両側に車が8台駐まっていた。福井が3台うち1台はタクシー、多摩、湘南、三河、富山、名古屋、だった。簡易トイレが設置されていた。

下山者の一人が自分の無線で現場にいない山仲間と「救急車・・・」と交信していた。何があったのか？

12：20登山開始、案内板横の木の階段を登り樹林の山に入って行く。はじめは緩やかだったが、すぐに急なザレた道になってくる。20分ほど登ったところに下山中の二人の熟年男性がいた。一人は両手を後ろに付きお尻を滑らせて降りている。左足の膝から下に添え木をあてタオルで縛っていた。付き添っている人の説明では、滑って転んで骨折したとのこと。ケガをした人は70才台中頃か顔が青ざめている。登山口での無線の交信はこのことだったらしい。登山口も近いし、自分が支援できることはないと判断し、声を掛けて自分は登山を再開した。

急なところにはロープが張られている。

登り切って尾根上の緩やかな丈の低い灌木帯になった所に「1492mピーク　別名コロンブスピーク？？　その心は？」と書かれた板がかかっていた。休憩ポイントのクイズ、分かりますか？

穏やかな登りの道には幹が地面を這うように張り出している臥竜ダケカンバがあり、時には枝を避けて進む。草原の中の緩やかな登り道で1m50ｃｍくらいの青大将が草の道を這っていてどきっとした。小さなピークを越えた先に、能郷白山の山頂があった。14時着。1時間40分かかった。標識が何本か立っている山頂は周りが背の低い木に囲まれて見晴らしはあまり良くなく、誰もいなかった。登山口の車の数からするともっと登山者がいるはずだと思っていたら、遠くから人の会話の声が風に乗って聞こえてきた。

声の方に5分ほど行ってみると、ピークには7，8人ほどの若者グループがいてわいわいやっていた。そこには白山権現奥の院の祠があり山頂部よりはるかに展望が良く、山頂部方向を除く4分の3位の展望が利いた。ガイドブックに載っていた写真の祠は木製だったが、近年の台風で被害を受け、現在は小ぶりの金属製に変わっていた。手を合わせ山行の安全を祈願する。

開山1300年記念に制作されたと記されている山座同定盤を見て同定作業を楽しむ。白山方向は薄曇りで良く分からなかった。午前中に登った冠山は、三百名山でも標高が1257mと低いので周りの山々に埋没していたがよく見ると烏帽

子の先の部分が黒く抜きんでていて確認することができた。遠く伊吹山と思われる姿が見えた。恵那山や御嶽山、乗鞍岳も見えているはずだが薄く霞んではっきりとは同定できなかった。

14：30 下山開始、山頂近くでは登ってくるそれぞれ単独の 3 人の若者とすれ違い、中間部のザレた急坂では転けないように慎重に、時にロープの助けを借りながら下り、16 時前登山口着、約 3 時間半の山行を無事終える。

この日は、越前と美濃の国境、日本海と太平洋の分水嶺の冠山峠と温見峠からそれぞれ冠山と、2 年前に開山 1300 年を迎えた能郷白山に登ることができた。

16：10、翌日登山予定の経ヶ岳の登山口、福井県大野市六呂師高原を目指す。かつて登った荒島岳（百 1524m）は山頂部が雲で覆われている。その西側の裾を巻くようにして北上する。田園地帯から望む荒島岳は大野富士とも称され、山体の大きさを実感できる。北の方角の高台に宇宙船のような形をした白っぽい建物が見えた。福井県自然保護センターだった。隣接する奥越高原青少年自然の家の駐車場に 17 時過ぎ着。退勤してきた女性に保月山（ほづきやま 1273m）コースの登山口への道を教えて貰い、途中の農家の人にも尋ねたら軽トラで広域基幹林道の分岐まで案内してくれた。分岐点には案内の標識もなく「広域」とはなっているが幅員は狭く、他の作業道と区別がつかなかった。

カーブの多い坂道を進み、ピークから少し下ったところが展望台のある駐車場だった。18 時を過ぎて、あたりは暗くなりつつあったが、展望台から見たオレンジやピンクの夕焼けが素晴らしかった。

先着が 2 台いて両端に車を駐めていたので自分は真ん中に、スペースを 3 台分ずつ空けて駐めた。暗い中ランプを点けお湯を沸かし、ビールを飲みながら食事し、20 時頃就寝する。夜中満天の星。

21 日（日）【3　経ヶ岳】

5 時起床。自分が寝てから 3 台、準備中も 2 台やって来た。夜中の霧で草が露っぽいので最後に出発することにし、ラーメンの朝食とする。

6：30 出発。林道のカーブを少し下ったところ右側に「経ヶ岳登山口」の標識があり、まずは保月山を目指して登り始める。岩石が混在する杉林の中を登ると林相が広葉樹の雑木林からブナの木が多くなってくる。30 分ほどで、ブナとミズナラが合体した「アダムとイブ」に着く。なんとなく悩ましい。保月山に 7：20 着、小休止。若者が一人登って来て先行していく。保月山山頂は灌木に囲まれて眺望はないが少し先に行くと杓子岳（しゃくしだけ・釈氏ヶ岳 1490m）が大きく見えてきた。

ヤセ尾根を下って登り返し、8:10 杓子岳着。正面に経ヶ岳の姿が大きく見え、山頂手前右側がすり鉢状に切れ落ちている。かつての火山壁だろう、周囲の穏やかな山容と異なっている。

風衝草原のクマザサの中を緩やかに進むと 10 分ほどで丸い穏やかな中岳（1467m）に至る。すぐに急坂の下りになるが、窪んで水が溜まり荒れている道の上に整備されたばかりの木製の階段はありがたかった。帰りに数えたら百段以上あった。下り降りたところが別のコースとの合流点で「切窓」と呼ばれ、山をすぱっと逆三角形に切り取ったようなところだ。ここから山頂までが笹の中の最後の急登でぬかるんでいて滑りやすく大変だった。下りはもっときついだろうと思いながら必死に登る。下ってくる人とすれ違うのに苦労した。

9：20 経ヶ岳山頂着。先客が 3 人いた。360 度展望の眺望は素晴らしく、ここから北西方向に赤兎山（1629m）、別山（2399m）を経て白山本峰（御前ヶ峰 2702m）に延びる山々の稜線が見えている。南側近くに位置する荒島岳は上部が雲の中だ。少し先にある二等三角点にタッチし、名を知らない山々に囲まれながらエネルギーを補給する。次々に多くの登山者が登ってくる。中には白山まで縦走する人もいるのだろう。

10：05 下山開始、近くに座っていた熟年男性と一緒に降りることにし、彼に先行して貰いゆっくりペースで下山する。大阪の人で 73 才とのこと。釈子岳と保月山で休み、駐車場に 13:30 着。登りよりも下りの方に時間をかけた山行で、一つの安全登山のあり方かなと思った。互いの今後の健闘と無事を祈って別れる。

14 時出発。次の山、三方岩岳の登山口、岐阜県白川郷を目指す。国道 158 号線（美濃街道）を東に進み、九頭竜ダムを通り岐阜県に入り、白鳥 IC から東海北陸道に乗り北上する。

白川郷に 16 時半過ぎに着き、まずはコンビニで買い物をする。次にＧＳで車の燃料を補給し、登山口までのアクセスを聞く。計画としては岐阜県側の白山白川郷ホワイトロード馬狩料金所脇の登山口から登り、三方岩岳から野谷荘司山（のだにしょうじやま 1797m）を反時計回りに周回し、鶴平新道の大窪登山口に下山しようとするもの。

馬狩料金所脇の登山口を確認していると、職員の人が声を掛けてくれて、事務所でいろいろとアドバイスしてくれた。大窪登山口と馬狩料金所とは 1.5km の距離があること。その間にトヨタ白川郷自然學校脇にも駐車場があることが分かった。三箇所を確認し、車中泊は大窪登山口、朝移動して日中の駐車は學校の脇、登山開始は料金所、下山は大窪登山口と決めた。

方針が決まったので、萩町合掌造り集落（＊）の外れにある「白川郷の湯」で温泉に入り、ジェット噴流を筋肉にあてた、混んでいた。

5台くらい駐められる大窪登山口は外光の届かない林の中にあり草地で、自分の車のみ。お湯を沸かし食事をし、20時頃には就寝する。

（＊）白川郷の萩町地区は、大小100棟あまりの合掌造りが数多く残り、また今でもそこで人びとの生活が営まれている集落として知られています。1976年に重要伝統的建造物群保存地区として選定されさらに1995年には五箇山（富山県）と共に、ユネスコの世界遺産（文化遺産）として登録されました。（白川郷観光協会）

22日（月）【4　三方岩岳、野谷荘司山】

5時起床。薄暗い中準備し、バナナとパンを食べ、車を學校脇に移動する。既に2台駐まっていて、単独の男性登山者が勾配のある舗装路を料金所方向に歩いて行った。登山届けを書き、6：25出発。料金所登山口6：45発。

露の多い草深い作業道からあまり光りの入らない山道に入ると歩きやすくなる。ところどころに工事に使われた赤い三角のポールが置かれていたりブルーシートの切れ端が木にかかっていた。目印としておかれたものだった。廃棄すべきものの有効利用とも思ったが、世界遺産合掌集落の白川郷にある登山道には相応しくないと思った。

1時間ほどで「ブナのこみち」の看板のある所に着き、ベンチで一休み。説明板には、ホワイトロードの白川郷展望台駐車場から一周約30分の散策路と書いてあるがあまり利用されていない感じ。

天然林のブナの森の中を登って行くと陽が差し込み気持ちが温かくなる。うっそうとした森から尾根道に出ると低木となり、進行方向に垂直に切り立つ大きな岩峰が現れた。三方岩の一つ飛騨岩だ。手頃な石に腰を下ろし、飛騨岩とその左側の深い谷を挟んだ向かい側の稜線を眺めながら水分とエネルギーを補給する。若者2人組が追い越していった。（今回のルートでは、三方岩のうち、越中岩と加賀岩は見ることができなかった。）

飛騨岩の後方を巻くようにして登って行くと、湿地帯に出る。今は端境期なのだろう、雪はなく、足を止めるほどの花はなかった。横切って登って行くと標識があり、右に行くと広い岩場の「山頂」に出た。9：55。ここまで先程の2人のほかには誰にも会わずに来たのに、山頂には20人以上の人がいて、ベンチや岩に腰を下ろして食事などしていた。ベンチで声高に談笑している3人の若者の姿は、地方の学園都市の駅前公園のような風景だった。

「三方岩岳」の立派な標柱はあったが「山頂」や「標高」の表示はなかった。近づいて改めて標柱を見たら、下方に少し斜めっている手書きで「山頂→」と書いてあった。登山者の誰かが書いたのだろう。

展望は抜群で、北西方向に北方稜線がのび、昨年秋に登った加越国境の山々、遠くから大門山（○）・奈良岳・大笠山（○）、それらの手前に、未踏の笈岳（◎お

いずるがたけ 1841m）が雲一つない空の下に連なっている。笈岳は夏道がない。南側には白山連山が他を圧倒するボリュームで横たわっていた。

広場の先からは、軽装のハイカーが次々にやって来ては去って行く。そこでガッテン！！　多くの登山者はホワイトロード三方岩駐車場（1445m）（＊）からの人達で、標柱のある広場は最高点ではなかった。自分は腰を下ろさないで、標柱の手書きの矢印に従い分岐まで戻り、向かい側の高見に向う道に進む。低木の樹林の中を登って山頂らしきところを探したが見つからず、下りになってしまった。最高点には標識がないみたいだ。ヤセ尾根なので人が滞留する山頂標識は作らなかったのか？

（＊）料金所でいただいたチラシではホワイトロード三方岩駐車場から三方岩岳まで登り 50 分、下り 40 分と記載されてる。

左側が谷となっている緩やかな登り下りの稜線歩きは快適だがところどころ崩壊地があり気を抜けない。それぞれ単独の 3 人の登山者と出合ったがいずれも軽装だった。

野谷荘司山への分岐を右手に進み、11：27 二等三角点のある野谷荘司山山頂着。この山は 1797m あり三方岩岳 1736m より高い。眼下に鳩谷（はとがや）ダムが緑の水を湛え、萩町の合掌集落と周りの黄金色の田んぼが見渡せる。集落のはるか上に翌日登ろうかなと考えている猿ヶ馬場山（○1875m）の穏やかな山頂部が見える。

中年の単独女性登山者が登ってきた。写真を撮って欲しいというので、1m に満たない山頂標識の高さに合わせて撮るために腰を下ろしたらと言ったら、膝が良く曲がらないからとの返事だった。膝の手術をしているとのこと、ホワイトロードから来たとのこと。自分は料金所から登ったなどと話したら、心底うらやましい口調だった。足が痛んでも山には行きたいとのことで、山がホントに好きなのだなと思った。

12 時下山開始。道を開いた地元の人の名を冠した鶴平新道は、登りに使った谷向かいの道とは雰囲気が全く異なり、切れ落ちてザレたヤセ尾根の道で、滑るのをストックや岩の所でスピードを抑制しながら降りていく。

尾根道から低木の広葉樹林帯に入るとしだいに緩やかになりほっとする。少し長めの休憩を取る。下って行くと純林に近いブナ林があり幹の太い老木やまだ細い若木などがいろんな形の枝を張って傾斜のある地形に混在していて、陽が射し込み、心癒やされる素晴らしい景観だ。

14：18 鶴平新道登山口着。昨夜お世話になった駐車場には車がなかった。林道の舗装路をトヨタ白川郷自然學校脇の駐車場まで歩く。學校に宿泊するファミリーが散策を楽しんでいた。約 8 時間の三方岩岳、野谷荘司山周回登山を無事終える。

翌日、予定した猿ヶ馬場山に登るかどうかはまだ踏ん切りがつかなかった。取りあえずガイドブックに書いてある林道まで行ってみることにする。

その林道はホワイトロード側からすると合掌集落の向こうの外れにあり集落を横断しないと行けなかった。白川郷バスターミナルの所でガードマンに停められた。集落内は結構大勢の人が散策し合掌造りのお店で買い物や見学を楽しんでいた。今は外国人はほとんどいない。ガードマンの話では、昨日まではもっと混んでいたとのこと。連休最終日の本日は客が少ないこと。集落内の車通行については通行禁止でなくあくまでも協力依頼で、集落内は実際には生活の場であり、地元の人、配送業者、宿泊者などはゆっくりと車を走らせていた。山登りの下見であることを説明したら通って良いことになった。

ゆっくりと、観光客の邪魔にならないように、時々車を停めながら進んでいく。集落の外れ左側の妙善寺と白川八幡神社の間の道は車一台通るのがやっとだった。神社側に合掌造り民宿が3軒並んでいた。集落を抜けた林道はさらに幅が狭く勾配も急で、乗用車では無理で4Wの軽トラでないと通行できないことが分かった。

集落の外側には田んぼがあり稲刈りをした所もあった。なんとか車を切り返し再び集落内をゆっくり通りガードマンに挨拶して集落から外れる。

コンビニの駐車場に戻り検討する。猿ヶ馬場山は最高点までは積雪期にしか行けない山で、無雪期には地形図には乗っていない林道を通り三角点までは行けるとのこと。所要時間は8時間を越える。今回は宿泊の予約はしていない。

実際の山行では、白川八幡神社に隣接する合掌造り民宿に泊まり、そこからスタートすることにしたいと思った。

次回山行の見通しが立ったこと、台風12号が近づいてきていること、4山登ったことなどから今回の山行はここまでとし、帰宅することに決める。

山は逃げない。元気でいればいつかは登れるだろう。

コンビニで「白川郷にごり酒」と「奥飛騨銀印」を買い帰途につく。途中で休憩しながら9月22日中には無事帰宅した。走行距離1329ｋｍ。

東海・北陸の境、両白山地＝加濃越山地4山の山行を終える。

令和２年１０月　ＮＯ９５　　アンチ・エイジング　山旅遊人

<会社近況>

10月に入りました。

ついこの間まで暑くてエアコンをいれていたのに、急に肌寒くなりましたね。

早めにストーブやこたつを出して、壊れている箇所はないか点検されると良いかと思います。

体調を崩されませんよう、どうかお体大切になさって下さい。

現場は引き続き本宮市の現場をお世話になっておりますが、間もなく完成の予定です。

もうすぐ須賀川市の現場が始まりますので、気を引き締めていきたいと思います。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

実り☆10月

最近、稲の穂が大きく実り風にさわさわと揺れるさまを見かけます。お米や、農作物などの豊作の時期を迎えました。１０月３１日にはハロウィンの行事がありますが、元々秋の収穫祭や悪魔祓いの儀式でアイルランドやスコットランドから始まったそうです。日本では仮装パーティーのイメージが強いですね。今年のハロウィンは“渋谷にこないで”などを呼び掛けていますし、どの地域も集まらずにオンラインや、個々での楽しみ方になりそうです。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

令和２年10月５日発行
有限会社　幸田建設
<発行責任者>幸田久美
〒969-1204
本宮市糠沢字八幡1-1
電話　0243-44-3816

<後記>実りの季節になりました。母の影響でいもくりかぼちゃが大好きなのでこの季節になると、栗ご飯や焼き芋、かぼちゃの煮つけなど異常に恋しくなります。美味しいものを美味しく食べられることに感謝しながら日々過ごしたいです。（ほしの）